

1

eラーニングは、なぜ注目されているのか？

年率80%以上の伸びが予測されるなど、その驚異的な市場の成長に、多くの企業がビジネスチャンスを感じているから。

「eラーニング」は人材教育のIT革命

「仕事が一段落したので、オフィスで自分のパソコンからサーバ上のウェブ教材にアクセスし、研修メニューを自習。わからない箇所はeメールで講師に質問。24時間以内に返事が戻ってくる。しばらく研修を怠けていると、eメールで警告文が送られてきた……（これは、eラーニングを使った社員研修の一例）」

最近、欧米や日本で、情報技術（IT）を使った教育研修手法「eラーニング」を社員教育に取り入れる企業が増えています。

米IBMは、昨年から社員・幹部教育や新技術の研究などに、eラーニングを本格的に導入しました。全研修メニューの約30%をeラーニング手法に切り替え、eコマース（電子商取引 巻末）を担当するエン

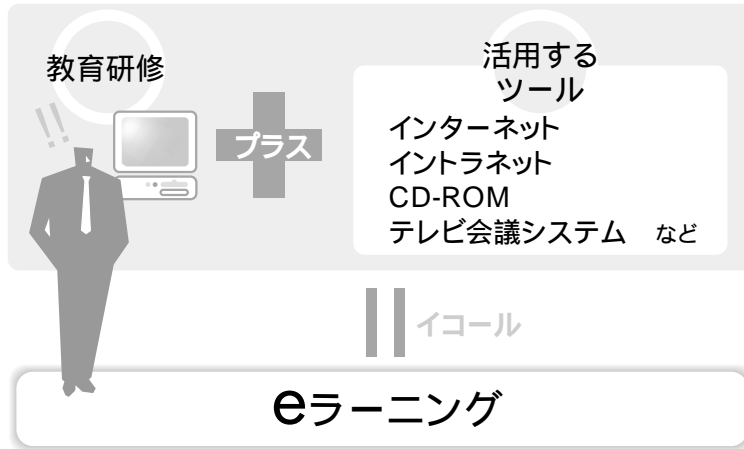
ジニアの養成に役立てています。そのおかげで、研修期間が短縮され、全社で年間に1億2500万ドルの研修コスト削減効果があったといえます。

このほか、eラーニングの一手法である衛星通信やISDNを介したテレビ会議システムによる遠隔講義を社員研修に導入する企業も珍しくありません。このようにeラーニングとは、「インターネットやCDROM、テレビ会議システムなどの情報技術や情報機器を取り入れた教育研修」を指しています。

では、企業側から見たeラーニング導入のメリットとは何でしょうか？ それは、社員研修のコストを削減しながら、より多くの社員に新しい研修内容を効率的に提供できることです。

また、社員側から見たメリットは、自分の好きな時間に自分に必要な内容を効果的に学習できることです。社内外での競争が厳しくなり、必要とされる知識

eラーニングのメリット



活用するメリットは？

企業側の
メリット

集合研修にかかるコストの削減
社員に新しい研修内容を迅速に提供できる
など

社員側の
メリット

自分の選んだ時間で学習が可能
自分のレベルに合ったコースを選択できる
など

ITの活用で研修コストを削減。
学習時間や場所の制約もなくなる

や専門スキルのレベルが高まり、常に自分を磨かなければならないのです。

企業までが、eラーニング市場に注目しています。な

教育研修業界、IT企業を中心にベンチャーから大

ぜなら、市場の驚異的な成長が見込めるからです。

「eラーニング市場は年率80%以上で成長」

IT関連調査会社の米IDC社の推計によれば、アメリカの企業向けeラーニング市場は、1997年の2億3400万ドルから2003年には114億ドルと、年率80%以上の伸びを予測しています。

日本でも、2003年頃には、市場規模が現在の約5倍にあたる2500億円にまで膨らむとの予測も出ています。

このため、情報システム企業、商社、研修サービス企業、さらに大学や学習塾など、さまざまな業種が続々とeラーニング市場に参入しています。また、eラーニングに特化したITベンチャーも数多く誕生しています。通信インフラやハード面だけでなく、教育研修内容(コンテンツ)の作成に特化すれば、参入コストも低く、大きなビジネスチャンスが広がっています。

近年のIT革命の普及と進展には目覚ましいものがあります。1990年代半ばまでのインターネットの導入期においては、まず、政府や学術研究機関がインターネットを利用し始めました。次に、企業が宣伝目的

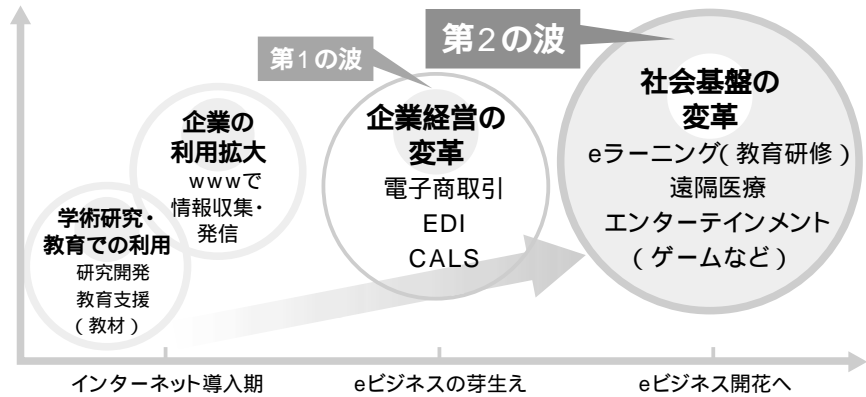
などのために利用するようになりました。

さらに、1990年代後半には、インターネットの利用は、産業界を中心にかなり定着してきました。そして、EDI(電子データ交換 巻末)、CALS(生産・調達・運用支援統合システム 巻末)、eコマース(電子商取引 巻末)など、ITが企業の経営革新に一気に導入されたのです。これがeビジネスの幕開けであり、eビジネスの第1の波といえるでしょう。

同時に、この時期にインターネットに加え、CATV(ケーブルテレビ 巻末)、ADSL(非対称デジタル加入者線 巻末)、衛星放送、携帯電話などのIT機器・サービスが社会全般に広く浸透してきました。これらをベースに、教育研修、医療、エンターテインメントなど、さまざまな分野でeビジネスの新しい波が生まれてきたのです。「次世代のインターネットのキラ・アプリケーションは教育研修だ」と考える人も増えてきました。キラ・アプリケーションとは、ハードウェアやインフラ・サービス普及の大きな原動力となるコンテンツのことです。

つまり、eラーニングは単に教育研修の効率化を図るだけでなく、ハードウェアやインフラ・サービスの

eラーニングはeビジネスの第2の波



eラーニングはさまざまな面で新たなビジネスチャンスをもたらすことが期待されている

産業にも、新たなビジネスチャンスをもたらすことが期待されています。

eラーニングは、eビジネスの「第2の波」

米システム機器大手、シスコシステムズのCEOであるジョン・チェンバース氏は、「eラーニングは2年半、着実に成長した後、一気に普及するだろう。電子商取引の成功をインターネットの第1の波と捉えると、eラーニングこそ第2の波である」と、eラーニング市場での成功を狙っています。さらに、eラーニングが我々の生活・人生と企業に及ぼす影響について、次のように指摘しています。

「インターネットは本をオンラインで購入するだけではない、もっとパーソナルなレベルで人々の生活を変えていくものとして。eラーニングを通じて、社員は仕事をより良く把握し、また、持たざる国は経済的なポジションを改善していくことができる。社員に適切な教育方法を見つけられない会社には、競争優位は築けない」(米コムデックス99年の講演での発言)

このように、eラーニングは新しい競争社会に生き残る処方箋といえるのです。

2

そもそもeラーニングとは何か？

基本的な意味は、「情報技術（IT）を活用した教育研修」のこと。似たような用語としては、WBT（ウェブ・ベースド・トレーニング）などがある。

「呼び方」はいろいろある

eラーニング（e-learning）という呼び方は、アメリカでも1999年頃から次第に広まり、今ではすっかり定着したようです。

では、そもそもeラーニングとは何を指しているのでしょうか。その基本的な意味は、「ITを活用した教育研修」のことです。

これに関連する他の呼び名としては、遠隔学習（ディスタンス・ラーニング 巻末）、遠隔教育（ディスタンス・エデュケーション 巻末）、CBT（コンピュータ・ベースド・トレーニング 巻末）、WBT（ウェブ・ベースド・トレーニング 巻末）、ラーニング・テクノロジー（学習技術 巻末）、オンライン・ラーニング、サイバー・ラーニング、バーチャル・ラーニングなど、さまざまなものがあります。

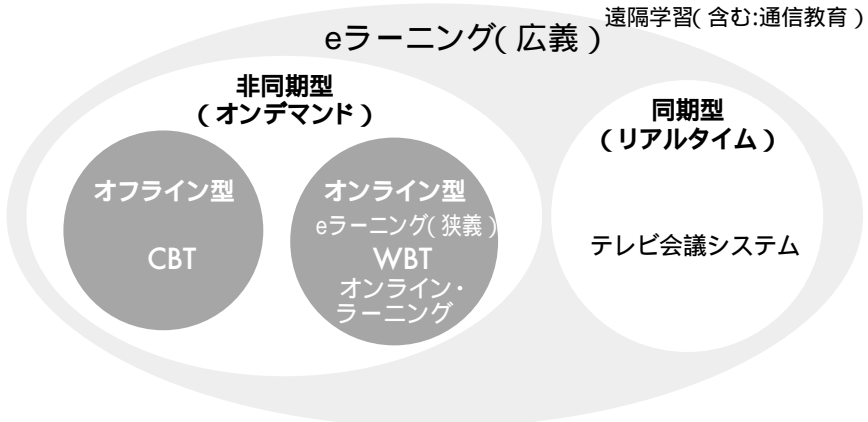
ITを活用した教育研修全般を指す呼称

eラーニングの定義には、さまざまな議論があります。eラーニングは多くの場合、WBTなどインターネットを利用して学習する、オンライン型の遠隔学習を意味しています。

ただし、オンライン型だけでなく、テレビ会議システムなどインターネット以外のITツールを利用した遠隔学習もeラーニングと呼ばれるようになってきました。つまり、eラーニングは「ITを活用した教育研修全般を指す呼称」として、幅広い意味で用いられているのです。

これだと遠隔学習とまったく同じように思えます。しかし、eラーニングは郵便による通信教育は含みません。あくまでITを活用しているかどうかがポイントです。

eラーニングの位置づけ



ITを活用した教育研修全般をeラーニング(広義)と呼ぶ

IT活用から見た学習手法の発展

eラーニングの原型は、コンピュータを活用した研修(CBTなど)です。これは、すでに1980年代頃から始まっていました。ITを活用した学習手法を、インタラクティブ性(一方向的か双方向的か)と時間(同期か非同期か)の両軸で分類すると、23ページの図のようになります。

同期とは「リアルタイム、またはライブ型」で同時に行われることです。逆に非同期とは、時間差がある「オンデマンド型」のことを指しています。

「従来型(タイプA)」「このタイプの教育研修は、同期(リアルタイム)で一方向的な対面式授業が主流でした。」

それが、CAI(コンピューター・アシステッド・インストラクション 巻末)などにより、一地点だが自分で時間を選んで学習できる「自学自習型(タイプB)」が可能となったのが1980年代でした。

しかし、情報機器の処理能力の問題やユーザーの利便性の問題からあまり普及しませんでした。投資コストの大きさから、研修分野ではむしろ否定的なイメー

1
2
3
4
5
6

ジをもたれるようになってしまいました。

ところが、1990年代のインターネット（特にWWW）の登場で一変します。その利便性と低コストにより、同期・非同期を問わずに双方向型の学習が技術的に可能となったわけです。

その結果、WWW上で教材を学習してeメールで講師とやり取りする「WBT型（タイプC）」が広く利用されています。

また、ビジネス・スクールのケース授業のように同期（リアルタイム）で議論を戦わせる必要がある場合は、「テレビ会議システム型（タイプD）」が使われます。このように、状況に応じた使い分けが可能となってきたのです。

講師と受講者の双方から進捗状況が確認できる

現在、eラーニング手法でもっとも普及しているのは、「タイプC」のWBT型です。その中心的なツールはインターネットです。ネット上ではテキストと画像教材が中心ですが、動画を組み込むなど、飽きさせない工夫を凝らしているものもあります。

また、ネット上でのコース管理システムにより、学

習者と担当講師の双方から研修の進捗状況が一目瞭然となるようになっていきます。

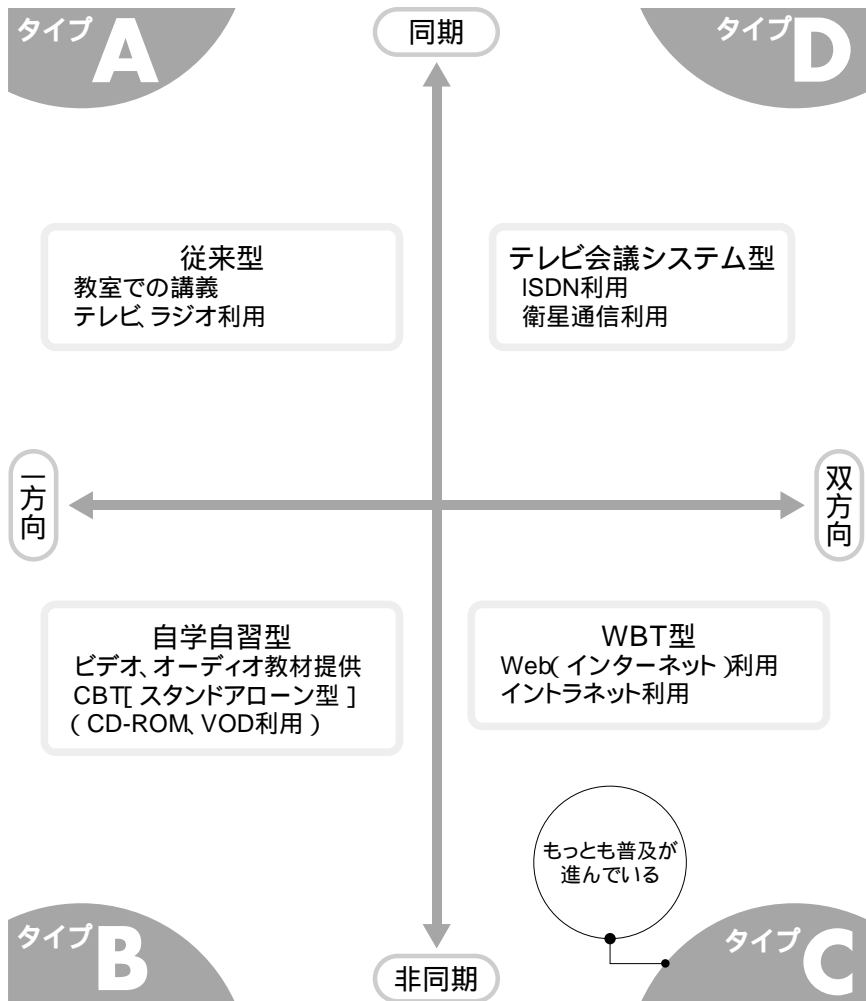
WBT型のもう一つのメリットは、研修内容を更新しやすいことです。研修メニューの中でも、新技術・新製品情報など変化の速い内容はネット上ですぐに新教材に置き換えが可能です。また、変化の少ない基本的な内容のものは、CD-ROM等で配付できます。

利用者側からすると、自分をもっとも必要とする研修を自分の好きな時間に利用できるなど、状況に応じて最適な選択が行えます。これなら自分のペースで効率的に学ぶことができます。

「WBT型」のメリットは、これだけではありません。掲示板システム（BBS）やテレビ会議システムを利用して、「グループごとにディスカッションし、共同課題をこなす」「講師と電子メールで質疑応答する」など、講師や学習者同士が協調して、双方向的な学習が可能なわけです。

海外の学習者や遠隔地にいる専門家たちと共同するなど、より刺激的な学習環境を提供できることも、WBT型の大きなメリットといえます。

IT活用から見た学習手法の分類



非同期(オンデマンド)型が主流だが、ディスカッションには同期(リアルタイム)型と、組み合わせが可能に

3

eラーニングはこれまでの教育研修とどう違う？

学習者自身が「自ら学び、次のパフォーマンスに生かす」という、より能動的な「学習（ラーニング）」が可能になったこと。

「組織中心」から「個人中心」の教育へシフト

これまで、教育や研修というと、学校や研修センターなど、ある特定の場所に受講者が集合して講義を受ける、というのが普通でした。これは、「対面式」「座学」「教室講義型」などといわれます。これは何世紀も続いたもっとも一般的な教育形態です。

ところが、社会の変化が速く、人々の学ぶべきことが急速に変化し、多様化してくると、教える側も、昔得た知識をのんびりと切り売りするだけでは立ちゆかなくなってきました。

特に、経済のグローバル化が進展し、競争が激しくなった企業社会では、社員に対してマスプロ型の画一的な教育を提供しているだけでは立ちゆかなくなってきました。もっと成果に直結する、より良い教育方法が求められるようになってきたのです。社員が単に研

修を受けるだけで、それが業務の成果（パフォーマンス）につながるなければ、企業にとっては死活問題となります。

つまり、最近の人材教育は、

「組織中心」「個人中心・自己責任」

「知識習得」「業務成果に直結（パフォーマンスの向上）」へと、その価値観がシフトしてきました。

この変化の対応策として期待されているのがeラーニングです。

より多くの人に効果的な学習を提供できる

では、従来の教育研修（教室講義型）とeラーニングの違いは何でしょうか？ それは、「双方向性のコミュニケーション」と「利用する技術」です。

従来の教育研修で使われていた技術は、テレビやラジオなど、講師側から学習者に一方的に提供される一

従来型の教育研修とeラーニングの違い

	従来型		eラーニング
コミュニケーション	どちらかといえば一方的 時間と場所が 限定される	➔	双方向的 いつでも、 どこでも
利用する技術	テレビ ラジオ	➔	インターネット テレビ会議シ ステム
人数	教室のサイズ に限定される	➔	不特定多数に 提供できる



従来型の研修よりもeラーニングのほうがフレキシブル。
組織中心から個人中心の学習へシフトしている